

## 東京帝国大学神道研究室旧蔵和漢書について

磯 前 順 一

現在、東京大学文学部宗教学研究室には、戦後宗勢調査資料等、日本宗教史及び日本宗教学史上、重要な基礎資料が幾つか保管されている。<sup>(1)</sup>それに並ぶ宗教学研究室の貴重な保管史料として、ここに紹介する旧東京帝国大学神道研究室所蔵の書籍類がある。

旧神道研究室蔵書のうち和漢書を対象とする本整理は、磯前の企画によって1991年春より始まり、その後諸メンバーが順次加わり、現在、四年目にいたる。現在の整理メンバーは、島菌進、宮田正彦、林淳、池沢優、宮崎賢太郎、小倉慈司、和田光俊、黒崎浩行、遠藤潤、そして磯前の10名からなる。現在、当該史料は史料整理の原則に基づき、作業が終わるまで一般向けの閲覧はお断りしている。しかし、整理が進むにつれて、外部からの閲覧の問い合わせが多くなったため、簡単にではあるがここに中間報告をおこない、整理終了までの間に合わせとしたい。なお、この報告も上述の整理メンバーに依拠するところが多いが、あくまでも記述の責任はすべて磯前にあることを明記しておく。

### 神道研究室略史

東大神道研究室は、大正9(1920)年9月に新設された神道講座を前身とし、大正12(1923)年に研究室として正式に発足する。当初、教官には神道講座の設置以前から宗教学の講義を担当していた加藤玄智助教授、同じく国史学の講義を担当していた宮地直一講師の二名を充てていたが、加藤は明治聖徳記念会所長との、宮地は内務省神社局員との兼任であった。そして、大正10(1921)年4月には、のちに神道学会主事となる田中義能を、熊本の第五高等学校から専任助教授として迎え、三教官体制を確立する。東京帝国大学哲学科出身の田中は神道思想・教育学を、同じく東大哲学科を出た加藤は宗教学を、国史学科出身の宮地は神祇史を各々専攻するなど、ヴァリエティーにとんだ教官構成であった。<sup>(2)</sup>

しかし、昭和8(1933)年には、田中の定年退官などから、これまでの教官は宮地一名となり、残り二名の枠は非常勤講師によって順次補充されてゆく。この時期以降、神道研究

室の収集書物の傾向も変化を示し、田中・加藤・宮地の三教官時代の洋書・人類学・マルクス史学の本そして和本までと多岐にわたるものから、宮地の研究姿勢を反映するかのようになり、和本の収集がもっぱら目立つようになる。

それと前後する時期から、当時の国史学科主任教授平泉澄の神道研究室に対する影響が強くみられるようになる。神道研究室の助手あるいは副手は既に昭和4年から置かれはじめたが、少なくともこの時期以降は平泉澄の意向によって国史学科の卒業生のなかから選ばれていたことが確認されている<sup>(3)</sup>。非常勤講師にも山本信哉・小林健三など、平泉とつながりをもつ垂加神道研究者あるいは国史出身者が少なからず招聘されている。

そして昭和13(1938)年には、平泉澄の日本思想史講座新設と時を同じくして、これまで兼任講師であった宮地が専任教授となり、この体制が神道研究室の廃止されるまで続いてゆく。しかし、神道研究室は最後まで学科に昇格することはなく、指導学生をもたない講座のみの研究室にとどまる。このことは、隠然たるかたちにせよ、神道研究室に対する学内の反発がすくなくなかったことを思わせる。<sup>(4)</sup>

その後、昭和20(1945)年8月の敗戦を契機に、GHQの要望をうけて同21年3月に東京大学は神道研究室を廃止処分にする<sup>(5)</sup>。そのかわりに、文学部は間近に迫った宮地の定年退官までのポストとして民間信仰調査室を暫定的に設ける<sup>(6)</sup>。それは講座をもつこともなく、昭和23(1948)年暮の宮地退官を境に宗教学研究室に吸収されて消滅する。神道研究室一後身の民間信仰調査室を含めて一は、こうして大正9年から昭和23年の約27年間の短い歴史を閉じたのである。

このとき、民間信仰調査室の部屋そのもの(法文2314室)が宗教学研究室所属に移管され、旧神道研究室の書籍は、その一部が国史学研究室等に移管されたことを除けば、部屋に配架されたままのかたちで引き継がれたと思われる。<sup>(7)</sup>

## 和漢書の内容

大正9(1920)年の講座開設から廃室までの間に神道研究室が収集した書籍総数は、寄贈・購入本併せて、和漢書1562部・洋書51部、総計1613部になる<sup>(8)</sup>。但し、この数字は総合図書館に保管されていた書籍購入記録『図書備付証 神道研究室』(大正15年2月—昭和18年2月)をもとに、神道研究室の私家本的目録『東京帝国大学神道研究室図書目録 昭和13年7月現在』(1938<sup>(9)</sup>)で補った、文書上の数字である。それらは昭和18年3月以降の記録を欠くうえに、整理作業中に登録漏れの和漢書がいくつか発見されており、実際にはもう少し上積みされた数字になるはずである。

旧神道蔵書のうち、史料的价值がもっとも高いものは和漢書類である。それらの大半は江戸中期から明治期にかけて上梓あるいは筆記された版本・写本であり、文化財としての

保存・管理の観点からいって整理を急務とする。とくに写本類は、今までにも翻刻テキストの底本に選ばれてきたものが少なくない。

一端を示せば、玉木正英筆『持授抄』（『日本思想体系 近世神道論・前期国学』岩波書店 1972）、梵舜筆『新撰亀相記』（『神道大系 古典編 13』神道大系編纂会 1992）、『山王神道秘説』（『神道大系 天台神道（下）』神道大系編纂会 1993）などがある。その他にも、旧神道研究室蔵書のなかにはテキスト校訂に用いられるべき本がいくつも含まれている。そのため、今回の整理ではこの和漢書類を優先的に撰び出し、書誌的な整理をおこなっている。現在のところ、若干の未整理書籍は残されているものの、その総数はおよそ 900 部にのぼる。<sup>(10)</sup>

和漢書類は、学派でいえば、山王・両部神道、法華神道、雲伝神道、伊勢神道、吉田神道、垂加神道、前期国学、平田国学、千家神道、明治神道、教派神道、和刻漢籍。ジャンルでいえば、神道書、記紀・中臣祓注釈書、古典テキスト、神社縁起書など、多岐にわたる内容を含んでいる。そのなかで量的に主体をなすのが、明治神道、平田国学、垂加神道、および神社行政文書をふくむ神社縁起書であり、それは当時の神道学の一般的傾向を示すとともに、神社史と宮地、平田国学と田中、垂加神道と小林・山本など、神道研究室に関係した教官の研究関心を反映したものになっている。また、少量ではあるが、田中が収集したと思われる教派神道に関する貴重な写本類もある。

そして、旧神道研究室蔵書のなかで白眉をなすのが、正親町家旧蔵本（以下、正親町家本と略す）である。正親町家本は、山崎闇斎から神道伝授を受けた公家正親町公通の家に代々保管されていたものであり、そこには、公通・公梁・実連・公明の各正親町当主のものをはじめとして、正親町家にかかわってきた玉木正英・吉見幸和・岸持之らの自筆本、さらに野宮定俊・跡部光海・谷秦山・松岡雄淵らの著作が含まれている。

大正 14（1925）年頃、旧神道研究室に摂取された正親町家本は、戦前よりその存在を広く世に知られ、多くの研究者によって引用されてきた。その意味で、垂加神道研究史上、正親町家本の個々のテキストの価値は十分に認識されてきたといえる。さらに、正親町家が従一位権大納言の家として、大嘗祭をはじめとする朝儀の復興に深いかかわりをもってきたことを考えるならば、正親町家本は個々の書物の価値にとどまらず、それらが集まって構築する蔵書全体の性質が、近年議論的になっている近世天皇制の形成史の解明に大きな役割を果たすであろう。

明治時代以降、本格的に散逸しはじめた正親町家本であるが、幸いなことに、主要なものの保管先は数カ所に限定されており、有職故実・記録の類は東京大学史料編纂所および内閣文庫に、神書類は当宗教学研究室にその大半が納められている。現在、宗教学研究室に保管されている正親町家本の数は、未整理の古文書・切り紙類をのぞくと、総数は 130 部

におよぶ。<sup>(11)</sup>ここに、他に流出した幾つかの本を加えるならば、神書類に関する蔵書の性格はかなり明確になるはずである。

## 宗教学研究室の保管

宗教学研究室が旧神道研究室の書籍を摂取したのは、時の主任教授岸本英夫の意向によると思われる。岸本は、神道政策をめぐるGHQとの折衝のなか、政府・GHQ・神社界のあいだに立ち、国家主義的色彩を除いた神社神道の維持に勤めようとしていた。その意味で彼は神道に肯定的な評価を下していた。このとき、神社界とのつながりをもたない岸本を補佐したのが宮地であった。

岸本にとって宮地の意図は図りかねるところもあったようだが、神社神道を今後の神道の指針とする点で両者の見解はちかいものであったと思われる。<sup>(12)</sup>両者のこのような関係は、宗教学研究室による旧神道研究室蔵書の摂取にさいして、積極的な要因をなしたと考えられよう。勿論、旧神道研究室の書籍吸収は、神道を日本宗教の研究対象として重要なものと考えていた岸本にとっても、少なくともその当初は望ましいものに映ったはずである。

こうして旧神道研究室の書籍は宗教学研究室に移管され、その整理は書籍とともに移ってきた旧神道研究室の副手野田幸三郎に委ねられることになる。その一方で、岸本は外部の研究者を招き神道に関する研究会を開いていたと言われている。<sup>(13)</sup>しかし、野田が小石川高校の教員として転出した後、これらの書籍は扱いかねるようになり、昭和29(1954)年における書籍ラベルの宗教学研究室名義への貼り替えを最後に、<sup>(14)</sup>本格的な整理・調査は途絶えてしまう。

さて、岸本は、神社神道を「神社の清浄なる神域が人々の心に与える感銘、民族の遠い過去からのつながりの象徴として祀られた神々の前に、首を垂れる時の永劫の生命の実感、そうしたものから湧き上がる心の歓び」<sup>(15)</sup>を「民衆のため」に与えるものとして、国家主義・軍国主義的な神道の対極に位置づける。それに対して、復古神道は「いはゆる国家神道」、伊勢・吉田神道は「限られた人々」のものとして、神社神道とは異質なものとして捉えられる。<sup>(16)</sup>その点では、旧神道研究室の書籍は岸本にとって積極的な意味をなさないものであり、事実、神道研究室旧蔵の書籍が彼の著書に引かれた痕を見出すことはできない。

すなわち、岸本の神道への関心は、生活共同体における日本の「民族的宗教」の在り方にあり、それはむしろ、現行村落のフィールド調査や新宗教研究へと連なるものであった。事実、その方向性は以後の東大宗教学研究室において、宗教社会学や人類学な方法論とともに明確なかたちで打ち出されるようになってゆく。それにともない、岸本の摂取した神道書類は積極的も意味をもたなくなり、思想的な文献学的方法も未確立のままに扱いかねる存在と化していったと考えられる。

戦後の神道研究は、岸本のように民衆的性格をもたないとする評価ゆえに、あるいはかつての国家主義との結びつきゆえに、研究分野として選択されることが敬遠されてきた。その結果、神道研究は人文科学のなかで傍流化の道を歩むことになる。勿論、神道研究を旧態依然の日本的伝統の闡明行為として捉えるなら、そのような拒否は然るべきである。しかし現在では、伝統の内在的理解の可能性を単純に信じる研究の在り方自体が、一部の閉鎖的な日本思想史を除くと、多くの学問分野で否定されるどころであり、今日的課題はそのような対象を実体的なものとして措定しようとする志向性そのものの分析におかれている。

我々がこのように神道研究を神道史研究として捉え直し、思想史学の研究対象として積極的に意味づけるとき、近代における神道学の運動は、神道にかかわりをもった人間の伝統形成の志向性を明らかにする格好の場所となる。このとき、再び、神道研究はかつて岸本が構想したように一かたちは違えども一、日本における宗教学の研究対象として重要な意義をもってくるはずである。

殊、東京大学神道研究室は、例えば宮地直一が神社史の究明を旨としたように、皇道哲学とは性質を異にすると言われており、国家第一の帝国大学に神道研究が存在することがどのようなかたちで可能であったのかということとも併せて、その解明は戦前の神道学の在り方を明らかにしてくれよう。その意味で、本整理作業には個々の神道テキストの管理・保存だけでなく、神道研究室の性格を解明する基礎資料として蔵書全体の構造を明らかにすることが必要とされる。

## 整理の課題

以上のように、旧神道研究室の書籍は、個々の史料さらにその集合体たる蔵書としても貴重な整理価値をもつ。事実、近年、海内外を問わず、書誌学を包括したうえで、蔵書そのものの思想史的位置付けを可能とするような研究の必要が唱えられている。しかし、現実には、少なくとも今の日本では、文献学と解釈の素朴な二分法信仰が根強く残っており、実証的な史料整理を標榜する書誌学と、対象の素朴な内在的理解にまだ固執する思想史のあいだの溝は深い。勿論、文献学と解釈は明快に切り離せるものではなく、両者は本質的に相互規定の関係にある。しかし、われわれは研究状況の旧弊さを非当事者のごとく論うのではなく、自らがおこなう書物整理という研究の現場において、その統合の試みを実践してゆかなければならない。

また、戦後、一貫して学問の社会性が問われてきたが、それはまず学問行為という限られてはいるが具体的な場をとおして実践されなければならず、この整理はまさにその姿勢の問われる格好の場といえる。史料を保管することが一方的な特権になってはならず、社

会に対する責任でなければならない。その意味で、われわれ史料を保管する側の人間は、自らの特権的性格を深く自覚し、十分な管理体制をもって自らの責を一般への情報公開というかたちで果たしてゆく義務がある。

現在のところ、具体的な目録刊行および情報公開の期日としては、1995年度内をひとつの目標として考えている。但し、洋装本については、「宗教学宗教史学科」のラベルが付されたうえで、宗教学研究室・文学部図書館・旧文学部図書館の三ヶ所に配架されており、現在でも閲覧が可能である。最後になったが、本書籍の整理過程で、当宗教学研究室の諸先輩をはじめ多くの方の励まし御助言をいただいている。整理の完成および史料公開をもって数々の御好意に応えたいと思う。

## 注

- (1) その一部は、島菌進「戦後宗勢調査資料」【東京宗教学年報別冊】VII 1989、で報告されている。
- (2) 井上順孝「解題 田中義能の教派神道研究」田中義能【神道十三派の研究 下】第一書房 1988、津城寛文「加藤玄智」田丸徳善編【日本の宗教学説II】東京大学宗教学研究室 1985、宮地治邦「序にかえて」【神道史の研究】叢文社 1980
- (3) 「西山徳氏インタビュー」【東京宗教学年報別冊】X 1993、および宮崎道生氏からの磯前の聴き取りによる。
- (4) 北山茂夫「日本近代史学の発展」【岩波講座 日本歴史】22 1963
- (5) 【東京帝国大学五十年史】1932 東京帝国大学、【東京大学百年史】1985 東京大学出版会、等。この項は、本整理研究会における遠藤潤氏の報告に負うところが多い。
- (6) 岸本英夫「嵐の中の神社神道」1963（『岸本英夫著作集5』溪声社 1976 84-85頁）
- (7) 野村暢清・田丸徳善両氏からの磯前の聴き取りによる。
- (8) 算出数字は黒崎浩行氏の報告による。なお、【図書備付証 神道研究室】の閲覧は、東京大学総合図書館の特別の御厚意による。
- (9) この貴重な目録は椿実氏が寄贈してくださり、現在、宗教学研究室に保管されている。
- (10) 数字は和田光俊氏の算出にもとづく。
- (11) 数字は小倉慈司氏の算出による。
- (12) 前掲「西山徳氏インタビュー」
- (13) 野村暢清氏からの磯前の聴き取りによる。
- (14) その担当者は、当時特別研究員であった田丸徳善氏である。
- (15) 岸本英夫「近代宗教精神と神社神道」1947（前掲書 97-98頁）
- (16) 岸本英夫「神道とは何か」1949（前掲書 111頁）

## **On the Japanese and Chinese Books the Former by Possesed Tokyo Empirical University Shintō Research Institute**

Junichi Isomae

Tokyo university Religious Studies Department now possesses the Japanese and Chinese books which were moved from The Shintō laboratory in 1948 due to the defeat in the second world war. The Tokyo empirical university Shintō course which was the predecessor of The Shintō Reserch Institute was established in 1920 ,and it became The Shintō Reserch Institute in 1923 . There were three teachers in The Shintō Reserch Institute. A head of this stuy was assistant professor Tanaka Yoshitō who later became a director of The Shintō Study Society,and the other two teachers were assistant professor Kato Genchi who was the head of Meiji-Shotoku Memorial Association and lecturer Miyachi Naoichi who was a famous public officer of The Shintō shrine bureau in the Department of the Interior.In the end,The shintō Reserch Institute was abolished by an edict of GHQ in 1948 . Kishimoto Hideo ,who was the head professor of The Religious Studies Department accepted the Japanese and Chinese books possesed by The Shintō Reserch Institute due to his interest in Shitō in order to advance the study of Japanese religious research.

At present,we estimate the number of these books to be 1562 .The content of these books covers various Shintō schools,for instance Suika shintō,Ise shintō,Sanno-ryobu shintō,and Hirata national learning. Some of these are very valuab mannsrpt copys by famous shintōists,for example Yamzaki Ansai, Yoshimi Yukikauu, Watarai Nobuyoshi, Ida Sadakane, Tayasu Munetake, Suzuki Shigetane and so on. These books are great value in giving us ample opportunity to research the Japanese history of the ideas.